# 夢を見る

作・石原 燃

登場人物
私（語り手）
ヘル　※私とヘルはひとりの役者によって演じられる。

郊外の戸建て住宅。私の部屋。
中央に書斎机と、椅子。
机の上には原稿用紙と筆記具。
その周りには電気スタンド、タバコ、灰皿、水差し、グラス。
そして古いラジオがひとつ。
パラオ諸島の民芸品である木彫りのトコベイ人形が一体置かれている。

1

私が椅子に座り、机に向かって原稿を書いている。
とりあえず最後まで書き終えたものの、しっくり来ない。
原稿用紙を整え、一息つく。
原稿のタイトルを口に出してみる。

ヘルについて。

原稿をはじめから読み始める。

漂うっていうのかな。
こう真っ直ぐに届くんじゃなくて。ふわりと空気に溶けていく、煙みたいに。ふわりと。
昔のラジオは真空管だったから、そういう音がしたんだよ。
ふわりと漂うような音。

ラジオのスイッチを入れる。音楽が流れ出す。

そこらじゅう焼け野原だったからね、戦争が終わってすぐの頃は。ラジオだけが楽しみだったんだ。神田の闇市に部品の露店が集まっててね。須田町から神保町のすずらん通りまでずらーっと。そりゃもうにぎやかだった。スピーカー、コイル、真空管。通りを端から端まで歩くと、たいていの部品がそろう。戦前に趣味でやってた人とか、軍の技術者だった人が、勝手にラジオを組み立ててた。あり合わせの材料で作るから形も性能もバラバラ。だけど、みんな望んでたんだよ。次々と流れる歌やドラマ。明るいニュース。好きなだけラジオが聴ける生活を。

ラジオに雑音が混じる。
ラジオを消す。

ヘルはラジオが好きだった。部屋にはいつも音楽やニュースが流れてて。「ラジオがないと身

体が動かないんだよ。」それが、ヘルの口ぐせ。

はじめてヘルに会ったのは一九七一年の暮れ。私が二三才の時。
恋人と別れたばっかりで、友達にも会いたくなくて、いつもひとりでふらふらしてた頃。
寒い夜だった。働いていた製本所の忘年会から帰る途中、乗ってた電車が巣鴨の駅で止まって、動かなくなった。

電車の急ブレーキの音。

駅員がホームを走っている。帰れなくなった人たちがごった返していた。切符の払い戻しの列はホームまで続いていて、駅員に状況を聞くこともできない。歩いた方が早い、そう思って駅を出た。歩くのは嫌いじゃない。空気が澄んで、星がよく見える。駒込まで歩いて、線路沿いの細い坂道にさしかかると、フェンスの向こうを見下ろしてる小さな人だかりができてた。私も一緒にフェンスをつかんで下を見た。電車が半分ホームにさしかかったところで停まってる。べこりと凹んでひびの入ったガラス。広げられた毛布からはみ出した手提げ袋。ストッキングをはいた足。……まただ。ここは本当に飛び込みが多い。
「ばかだなあ。」
思わずそうつぶやいて、フェンスから離れた時、となりにいた人がこちらを見ていることに気がついた。和服を着た年配の女の人。
「あの、なにか。」
女の人は私の顔をじっと見ている。
絡まれるのかと思った。
「吸う？　ホープだけど。」
その人は私にたばこを差し出した。
「いえ、吸わないんで。」
「そう。あんた顔真っ青だよ。うちの店すぐそこなんだ。ほら角に見える赤ちょうちん。「はる屋」って書いてあるだろ。ちょっと休んでいったら。ね、そうしなよ。」
女の人は私の腕をとって歩き始めた。びっくりしたけどついて行くことにした。身体が冷えてたし、……面白そうな人だと思ったから。

「はる屋」の広さは四坪くらいで、カウンター席が十席だけ。奥には扉があって、小さい厨房につながってる。カウンターに置かれた木彫りの人形。柱に貼られたドル紙幣。そして古いラジオ。常連らしいおじさんが二人で飲んでいた。「おいヘル、いつまで待たせるんだよ。」「酒が切れちまったよ。」と、おじさんたちが口々に言う。「ヘル」というのは、女の人のあだ名のようだった。女の人は「ちょっと待ってよ。」とおじさんたちに言うと、エプロンを着けながらカウンターに入り、私におしぼりを出してくれた。
私がお酒を注文し女の人が厨房に引っ込むと、となりに座ったおじさんが「あの電車に乗ってたのか」と話しかけてきた。

ひとつ後ろの電車だったんですけど、巣鴨で動かなくなっちゃったんで歩いて来たんです、アパートこの先で。……多いですよね、ここ。……大変ですよ、家族は、すごい額の損害賠償請

求されて。払えないときは相続放棄すればいいんですよ。でも資産も手放さないといけないし、手続きも面倒くさいし。……あ、いや、全然。そういう仕事じゃないです。知り合いがちょっと。

話し過ぎたかなと思っていたら、女の人がお盆にとっくりを乗せて出てきた。それから他愛のない世間話をして、おじさんたちが帰ったのは深夜十二時。
どうしよう、そろそろ帰った方がいいかなって思っていたら、おじさんたちを見送りにいった女の人が戻ってきて言った。
「やっと帰った。ちょっと待っててね。いま新しいの出すから。」
「でも、私もそろそろ。」
「やだ、そんなこと言わないで、もうちょっとゆっくりしてってよ。ほんとにすぐだから。あ、塩辛、食べる？　（小鉢を出し）これね、うちのおすすめ。あたしが作ったの。食べて、食べて。」
おいしい塩辛だった。私は、もう少しいることにして、尋ねてみた。
「あの、ヘルってどういう意味ですか？」

私、ヘルになる。
たばこに火をつける。

意味？　大した意味はないよ。地獄？　そんなんじゃない。まあ業界用語みたいなもんだね。隠語だよ。海軍さんの隠語。「スケベ」って意味。なんでって、すけべえを漢字で書いてみな。「助ける」と「平ら」だろ。英語にすると、「ヘルプ」と「フラット」。ヘルプフラット。略して「ヘル」。わかった？
そう、海軍さん。南洋に行ってたんだよ、若い頃パラオに。従軍慰安婦としてね。まあ、いいから聞いてよ。そこで出会った海軍大尉がつけてくれたんだ、ヘルって。そのトコベイ人形くれた人。見たことある？　パラオの民芸品。ある日、その大尉があたしのとこにやって来て、部屋に入るなり布団の上にあぐらをかいてね、「ヘル談をしてみろ」って。要するにすけべな話のこと。
ヘル談が得意で、いつも人を笑わせてるような人だった。なのに、その日はいつになく思い詰めた表情で「笑いたいんだ。笑わせてくれ。」って。
特別な任務でもあったのかもしれないね。
話してやったよ。
朝鮮に鎮海って海がありますでしょう、ある兵隊さんが、その鎮海を出航するってときに、日本の妻に電報を打ったんです。佐世保の港まで迎えに来てくれって。「チンタツ　サセニコイ」。妻は悩んで悩んで、悩んだ末に返事を打った。「ムリニタタスナ　スグイケヌ」
大尉は大きな声で笑い出した。いつまでも笑い止まなくて。涙流してね。それから涙を拭いて、姿勢正してこう言った。「貴様を今日からヘルと呼ぶ。」敬意だよ。わかる、敬意。ヘル談っていうのはね、ただのスケベ話じゃないの。海軍さんにとっちゃ、なくてはならないものだったんだから。海はあまりにも大きくて、その上、敵がどこから襲ってくるかわからない。張り詰めてたらおかしくなっちまうから、笑っていられるものが必要だったんだ。だって笑っていれば忘れられるだろう、自分たちが誰で、なにをしようとしているのか。最高のヘル談は、バカ

バカしくて、誰が聞いても笑っていられる、そういうものだったんだ。こんな話面白い？

たばこを消し、私になる。

面白いです、と答えた。

「うちの父も南洋に行ってたから。詳しいことはなにも聞けなかったけど、南洋のことずっと知りたいと持ってて。」

私がそういうと、ヘルは嬉しそうに目を細めた。

臨時ニュースが流れる。

「臨時ニュースヲ申シ上ゲマス。臨時ニュースヲ申シ上ゲマス。」

「大本営陸海軍部、十二月八日午前六時発表。」

「帝国陸海軍ハ今八日未明、西太平洋ニ於ヒテ、アメリカ、イギリス軍ト戦闘状態ニ入レリ。帝国陸海軍ハ今八日未明、西太平洋ニ於ヒテ、アメリカ、イギリス軍ト戦闘状態ニ入レリ。」

ヘルになっている。

あたしがパラオに行ったのは、昭和十七年。日本がアメリカと戦争をはじめた次の年。十七歳だった。あたしが生まれる三年も前から、パラオは日本の一部でね。パラオだけじゃない。トラック諸島も、サイパンもテニアンも。全部ひっくるめて南洋って呼ばれてたんだ。

南洋行きのことを教えてくれたのは、芸者仲間の小鈴ちゃん。（笑って）あの時の小鈴ちゃんの顔、忘れられないよ。五十銭のカキフライ食べながら「借金返せて貯金もできるんだって。こんなカキフライいくらだって食べられるようになるんだから。」って、鼻の穴おっぴろげちゃってさ。あたしも同じ顔してたと思うけどね。そりゃ迷わず飛びついたよ。だって夢みたいじゃない。貯金だよ。借金返すのだって諦めてたのに。（両手を見せて）ほら見て、この手。これは霜焼けの崩れたあと。これはアカギレ。これは鎌で切ったあと、これはやけど。手だけじゃなく、体中傷だらけなんだから。この傷の数だけ借金があったんだよ。最初の借金は八つのとき。おっかーがあたしを子守奉公に出して、周旋屋から二十円受け取った。それがあれよあれよと増えちゃって、置屋に売られて三百円になり、着物代やお稽古代で千円になって、気がついたら三千円。減ったことなんか一度もなかったんだから。一生かかったって返せないと思ってた。

はじめはヤケになるなって言われたりしたよ。まあ南洋なんて行くのは、内地の食いつめ者かはみ出し者、そう相場が決まってたからね。だけど、その募集はお国がやってたんだもの。民間の業者についていくのとは訳が違う。あたし必死になって説得したよ。

「恥ずかしいことなんかなにもない。お国のためには誰かが行かなきゃ。大丈夫、軍属扱いだから、死んだら靖国神社に、軍人さんと同じように入れてもらえるって。お国のために働けるんだから。役に立ちたいんだよ、あたしだって。」

そしたら置屋のお母さんもお客さんたちも、「若いのに感心だ」とか「けなげだ」とか言ってくれた。半月後の横浜から出る船に乗ることが決まってからは、その日が来るのを指折り数えて、楽しみにしてた。

嵐と荒れ狂う波の音がする。

乗ったのは山城丸って汚い船。大きい貨物船で、三千トン以上あった。軍人さんやその家族、いろんな人が乗ってた。あたしの居場所は船底の倉庫。ネズミが走り回ってるし、暑くて臭くて、嫌な場所よ。おまけにシケがすごくてね。海が怒り狂っているみたいなんだよ。どーん、ぎぎぎーって。軋んだ音をたててね、どっちが上なのかわからなくなるくらい大きく揺れた。一緒に乗ってた朝鮮人の女たちが、アイゴー、アイゴーって泣き叫んでた。もどしすぎて胃の中からっぽだったけど、そんなこと大したことじゃなかった。海は荒れてるくらいがちょうどいいんだって言い聞かせてた。いよいよ南洋に行けるんだもの。夢にまで見た新しい生活。もう歌い出したいくらいだった。

嵐の音がやむ。

コロール、アラカベサン、バベルダオブ、カヤンゲル、ウルクターブル、ウーロン、マカラカル、セブンティ・アイランド、ゲロン、カーブ、ペリリュー、アンガウル。
いまでも覚えてるんだ。パラオの島の名前。二百以上もあるんだよ。
どの島も大きな緑の木が生い茂って、空と海はどこまでも青く広がってる。
海に手を浸したら、小魚がちょろちょろって珊瑚礁の下に逃げていく。きれいだったけど、太陽が近くてね、死ぬほど暑かった。
上陸したのはコロール島。小さな島を海軍が占領してた。移住してきた日本人はみんなそこにかたまって暮らしてたんだ。喫茶店やバーがあって、あたしが生まれた村なんかよりずっと都会だった。

あたしは将校さん専門の慰安婦だったんだ。大勢の客を取らされるのは、一般兵隊用の慰安婦。あっちは朝鮮や沖縄から連れてこられた女が多かった。あたしは日本人だし、三味線が弾けたからね。特別だったんだ。コロールの町に連隊がやってくると、旅館は軍人さんたちでわきかえって、どんちゃん騒ぎだよ。将校用の慰安婦は、一日に一人、客を取ればよかったから楽なもんだった。三千円もあった借金はみるみるうちに減ってった。

あの頃が一番幸せだったよ。お風呂の準備から食事の支度まで、島の女たちがしてくれるから、あたしたちはなんにもしなくていいの。すごいんだから。三度三度炊きたてのご飯。南洋で取れた鰹の煮付け。土人に酒やタバコを渡すとパパイヤとか、バナナとか、パイナップルなんてのを持ってきてくれる。もう食べきれないくらい。夢中で食べたよ。たまにはうるさいことも言われたよ。日傘をさして歩けって。将校用の女はやっぱり色白でないと困るというわけ。日傘がないっていうと、さすが海軍。すぐ軍艦で三〇本運んできた。将校用の女たちだけにね。週に一回、病気うつされてないか検査に行くんだけど、日傘をさしているかどうかで、将校用なのか、一般兵隊用なのかすぐに見分けがついたもんだよ。……小鈴ちゃん？　小鈴ちゃんはなぜか一般兵隊用に回されたんだ。半年くらい経った頃だったか、病院で小鈴ちゃんにばったり会ったんだけど、なんだか痩せちゃってね、一回り小さくなって見えたよ。あたしが手を振っても、ぼんやり見つめ返すだけでさ。「大丈夫？」って声かけたら、「なんとかなってる。馴

染みの客が時間を延ばして休ませてくれるから。心配しないで。」気まずかったけど話し続けたよ。

「土人のやつら抜け目ないよね。はじめのうちはタバコひとつでバナナなんかを持ってきてくれたのに、段々図々しくなっちゃって、タバコだけじゃだめ、酒がほしいなんていうようになってさ。この間なんて草履がなくなったと思って探してたら、すまして履いているんだから。油断もすきもないよ。あたしたちもあれくらい図々しくないと生きていけないよ。ね、そう思うでしょ。」

だけど小鈴ちゃんときたら、にこりともしないんだよ。洞窟みたいな目して「もう帰らないと。」ってゆっくり歩いて行った。そのとき、もう小鈴ちゃんには会えないなと思った。どうしてって、笑わなかったからだよ。笑わなくなった人はみんな死んじゃったんだから。

パラオの月はね、大きくて、新聞も読めるような明るさなんだ。月明かりで砂浜に椰子の形の影ができて、ロマンティックだった。初恋の人は、戸田さん。階級は中尉。はじめて相手をしたときに、これから散歩にいかないかって誘われてね。これからったってもう夜よ。兵隊さんと外で会うのは禁止されてたから、二人で考えて、椰子の木のところで落ち合うことにした。あの人が玄関から帰る間に、あたしは部屋の扉に内側からかんぬきを下ろして、窓から帯をたらして壁をつたい降りてね。マングローブの森をはだしで走った。隣の部屋の八重ちゃんだけは気が付いてたけど、見て見ぬ振りをしてくれてた。よく呼び出されてデートしたよ。夜の浜辺を手をつないで歩いたり、椰子の下に並んで腰を下ろして、月を見ながらお酒を飲んだり。粋な人でね。浅草で生まれて、子どもの頃から映画館や劇場なんかに出入りしてたんだって。カルメンだの、エノケン・ロッパだのいろいろ教えてもらった。

（間）ある日ね、大事な話があるってあの人に呼び出されたんだよ。沈んだ声でさ。別れ話かと思った。でもいつまで経ってもなんにも言わないで、うじうじと砂を掘ってんの。しびれを切らして怒鳴ってやったよ。「貴様、それでも将校か。」兵隊さんって、おかしいよね。そう言われるとシャンとするんだから。よくそうやって遊んだもんだよ。でも、その日は違った。

「内地へ帰れ。もうすぐ引き上げ命令が出る。トラック島も壊滅した。」

なんて言ったらいいのかわからなかったよ。突然壊滅なんて言われたって、なにがなんだか。あの人手帳になにか書いて、破ってよこした。

「無事に帰れよ。なに貴様なら敵に狙われても、弾の方が避けていってくれる。目が覚めたらもう内地さ。内地で困ることがあったらここを訪ねろ。助けるよう言っておくから。」

この手を両手で握りしめてね。見上げたら目が真っ赤だった。

……そうわかった、あたしはそれだけ言って、あの人ひとり残して旅館に帰った。

気持ちは嬉しかったけど、正直いって途方にくれた。訪ねろって言われても、そんな走り書き、漢字ばっかりで読めないし、命令がなかったら勝手に帰ることもできないしね。

たばこに火をつける。たばこを吸い、気持ちを落ち着ける。

ひどい空襲だった。死ぬと思ってたよ。

だけど、どうとでもなれと思ってると、不思議と弾が当たらなくてね。

やっと引き上げ命令が出たのは昭和の十九年、三月。

町は壊滅してたけど、あたしは無傷だった。見事に生き残っちまったよ。

……もう一本つけようか。あんた、ほんとにこんな話面白い？

たばこを消す。

私になる。

私は、ヘルがお燗をつけるのを見ながら、「はい」と答えた。

「戦争のことは聞いちゃいけないと思ってたから。父が南洋に行ってたこと、母に一度だけ聞いたことがあるんです。だけど、母はなんにも答えてくれなかったから。」

ヘルは私の顔をじっと見つめていた。

そして、ゆっくり言った。

ヘルになる。

あんた、あの人の娘じゃない？

戸田さんでしょ、あんたの父さん。

いいんだよ、隠さなくても。

パラオで稼いだお金持ち逃げされて、困ってさ、会いに行ったんだ、あの人の家まで。戦争が終わって五年経った夏だった。手帳の切れ端握り締めてね。死んじゃったかも知れないと思ってた。コロールにいた兵隊さんたちは、みんな玉砕したって聞いてたから。だけど、家についたらね、顔の丸い女が出てきて教えてくれた。「主人は留守で。」って。

嬉しかったよ。だって生きてるってことじゃないか。出かけられるくらい元気で。「よろしくお伝えください。」って声がうわずっちゃった。

「ヘルです。そう伝えてくだされば わかります。」

女が眉をひそめて「ヘル？」って返すから、笑わそうと思ってね。

「腹が減る、のヘルです。」って。

ちっとも笑ってくれなかったけど。見たら女の後ろに小さい女の子が立っててね。あの人にそっくりの顔してこっちを見上げてるの。ああ、この子戸田さんの娘だと思った。

「お嬢ちゃん、名前は？」って話しかけたら、さっと隠れちゃったけど。

あんたの顔みてピンと来たんだ。あの時の子だってね。

あたしのこと、覚えてるんじゃない？

違うの。ほんとに。でもパラオにいたって。

そう。なんだどきどきしちゃった。怒ってるはずなのに、おかしいと思った。

ほんとに覚えてない？　あたしがもう一回うちに行ったこと。

手紙が来てね。それに書いてあった。

「女房に知れると困る。もう来ないでくれ。」

頭にきちゃってさ。会えなくてすまないの一言くらい書いてあるのかと思ったら、もう来ないでくれって。だけど、困ったら訪ねてこいって言ったのはあっちじゃない。こっちはわざわざ人に頼んで読んでもらったのに、ばかにしてるだろ。どうしても許せなくてね。知れると困るっていうなら、教えてやろうじゃないのって、家の前で騒いでやった。表札のところに手紙を貼りだして、太鼓たたいてね。「（でたらめに歌う）一緒になろうと誓っておいて、なかったことにしようだなんて、あんまりだ。あんまりだ。」そしたら、ほら、あんた出てきて、あたし

のこと睨んで、「うるさい。帰れ。」
そう。違うの。

たばこを吸う。

なんでかねえ。みんな隠したがるんだよ。
戸田さんだけじゃない。みんな。
花巻の家に帰ったときも、妹が近所の目を気にしてびくびくしてた。南洋の話はしないでくれって。もう東京に行くからって言ったときの嬉しそうな顔ったらなかったよ。
悪かったね。間違えちゃって。あんまり似てるからさ。
もし何かが違ってたら、何か違ってたら、あたしがあの人の子ども生んでたかもしれない。……なんだか他人な気がしなくてね。……勝手だね。

たばこを消す。
私になる。

母のことを思い出した。父の七回忌のとき。「お父さん戦争中南洋にいたんでしょ。」って聞いたら、驚いて私を見た後、黙り込んでしまった。
ヘルは母が答えられなかったことを教えてくれる人なのかもしれない。
それ以来、私は「はる屋」に通うようになった。

再びラジオをつける。静かな音楽が流れる。

2

「はる屋」の女将は、はる子姐さんといって、ヘルが仕込みっ子をしていた神楽坂の置屋で芸者をしてた人。まだ小さかったヘルのことをとても可愛がってたらしい。はる子姐さんは板前の晋さんと結婚して「はる屋」を開いてから、二十年間、ずっと店を切り盛りしてきた。でも身体を壊してからは、たまに様子を見に来るだけになり、代わりにヘルがカウンターに入るようになった。
ヘルは私が行くと、「おかえり」って迎えてくれた。
私が仕事で遅くなって、店の料理が売り切れていても、ヘルはいつも私が好きな物を取って置いてくれた。帰りには手作りのイカの塩辛を持たせてくれて、「ずいぶん可愛がってるじゃねえか。」と他の客にからかわれると、冗談ぽく「娘なんだよ。」と答えてた。

ラジオが混線し、雑音が混じる。
ラジオを消す。

ヘルと出会ってから半年が過ぎた、ある夏の夜。八時過ぎ。

女の人が、「はる屋」に怒鳴り込んで来た。
「しらばっくれたって無駄だよ。うちの亭主たらし込んだくせに。白状するまで帰らないんだから。」
髪をきちんとセットして、千鳥格子のワンピースを着た女の人。
内田っていう古本屋の奥さん。ヘルが呆れて言い返す。
「あんたの亭主になんか興味ないよ。ばかばかしい。変な言いがかりつけないでよ。」
「あばずれ。」「どろぼう猫」奥さんがわめいていた。「いいかげんにしてよ。あんたそんなんだから浮気されるんだよ。」ヘルは奥さんの腕を掴んで、店の外に出そうとした。奥さんがヘルを蹴ってカウンターのなかに逃げた。「やめて、汚い手で触らないで。梅毒になる。」って、カウンターに置かれてた皿やグラスを投げつけた。「なにするんだよ、てめえ。」ヘルが奥さんの髪を掴んだ。その時、奥さんが言った。
「放せ。金のためなら誰にでも足を開くくせに。この淫売。」
そこからがすごかった。つかみ合いの乱闘。倒れ込んだ奥さんのワンピースをヘルが破く。空き瓶の割れる音。
晋さんが引き離しても、ヘルは叫び続けてた。
「放してよー。あそこの毛むしり取ってやるんだよー。放せー。放せー。」

私は、店を抜け出して、家に帰った。見ちゃいけないヘルの姿を見たような気がした。次の日、昼前に起きて、買い物に出た途中、「はる屋」を覗いたら、晋さんがひとりで新聞を読んでいた。声を掛けると、あの後、近所の人が通報して、警官が来たんだと教えてくれた。二人をなだめようとした警官にヘルが唾を吐いて、公務執行妨害。一晩留置所に入れられて、釈放の連絡がさっきあったらしい。
「まったく、おかげで俺まで事情聴取だよ。」と晋さんがぼやいてた。

二時頃、ヘルはひとりで帰ってきた。
疲れ切った顔をして、いつもより老けて見える。店にいる私を見てびっくりしてたけど、そのまま私の隣の席に座って、ビールを飲み始めた。
晋さんがカウンターの中の椅子に座り、説教する。
「ヘル。少しは大人になれや。いちいち真に受けてたら商売にならねえだろ。お前みたいな境遇の女、色眼鏡で見るなっていうほうが無理なんだから。誤解されたくないんなら、パラオだの、慰安婦だの、余計なことは言わなけりゃいい。なあ、あんたもそう思うだろ。」
「そりゃ、そうかもしれないけど……。」
ヘルはなにも答えなかった。ぼーっとしてビールを飲み続けてる。
晋さんは仕込みの買い物に出て行った。
二人きりになって、気まずい沈黙が流れると、ヘルがラジオをつけた。

ヘルになり、ラジオをつける。静かな音楽が流れる。

ラジオがないと身体が動かないんだよ。……ほんと、ブタ箱って嫌だね。しんとして。ラジオがあるといいのにっていつも思う。隣の独房から女のうめき声なんかが聞こえてくると、いろいろ思い出しちゃってさ。昔のこと……。このたばこあんたの？　あそう。まあいいか。（た

ばこを一本取り、火をつける。）……いち子っていう子がいたんだ、妹分だった。一緒にパンパン屋を開いたの。パラオで稼いだ金がなくなる前に、どうにか生活しなくちゃって。終戦の二年後だったかな。ダンスホールで向こうの兵隊に身体売るのは嫌だったから、それなら自分たちで稼ごうってね。あたしは二十二で、いち子は二十歳そこそこだった。割とうまくいってたんだよ。なんせ若かったから、いくらでも客がついた。……持ち逃げしたの、いち子が、店の金を。今日みたいに暑い日だった。私は一日外に出てて、店に帰ったらいち子がいない。金庫はからっぽ。……取り返してくれってやくざに頼んだ。パンパン屋を開いたときに顔付けに行ってたからね。……いち子はゴミ捨て場で見つかったよ、虫の息でね。あそこにかんな屑をいっぱい詰め込まれてた。……そこまでやると思わなかったんだよ。……金は返ってこないさ。全部男に貢いだ後だった。あたしは一文無しだよ。仕方ないから、街に立って客を引いた。あの頃はパンパン狩りがひどくてさ。戦争のせいで、あたしみたいな女が街にあふれてたからね。立派な身なりをした女もいたし、普通の奥さんみたいな女もいた。松葉杖をついた女。肺病病みの女。まだ十四、五歳くらいの子どもだっていた。あたしも何度も捕まったよ。だけど、しようがないだろ。いち子がお金持って行っちゃったんだから。警察でもよく説教されたけど、腹の中じゃ「クソ食らえ」よ。やらなきゃ生活できないし、やっちゃいけないって法律があるから捕まえに来るだけなんだから。身体売るしかなかったんだ。あんたから見りゃ、もっとうまい生き方があるんだろうけど、できなかったんだよ、あたしには。

……嫌になっちまう。ブタ箱に入ると、ゴミ捨て場で見たいち子の姿がちらちらするんだ。白い太ももに青黒い痣がいくつもできて、血がこびりついて……。昔からそう。夜が来る度にちらちら、ちらちら。いろんなこと夢に見るんだ。いち子や、小鈴ちゃんのこと。子どものときのこと。はじめて客を取ったときのこと……。

あたしみたいな女は、のら犬みたいに見えるんだろうね。昔のことだって言ったって、いつまで経ってものら犬のまんま。あたしがばかをする度に、みんな「大人になれ」っていうけどさ、のら犬に大人になれって言ったって無理なんだよ。まず人間にしてよって言いたいよ。……あんたに言ってもわかんないね。

私になる。

ヘル、もう少し自分を大事にしなよ。お酒飲んで愚痴ってたって身体壊すだけじゃない。

「ほら、全然わかってない。」

ヘルがラジオのボリュームを上げる。
ラジオに合わせてヘルが歌う。

私は「はる屋」を出た。線路沿いの道を少し下ってから振り返ると、まだラジオの音が聞こえてた。

私、ラジオを消す。

3

「ねえ、聞いて。今度ね、あたしの話が雑誌に載るんだよ。戦争に行った女たちを取材してまわってるんだって。折角の機会なんだから、あたしは話すよ。あたしみたいな女がいたんだって。恥ずかしいことなんかなにもないもの。」

ヘルがそう言ったのは、ヘルと出会ってから一年半が過ぎた頃。

雑誌の取材なんてはじめてだったから、来る人来る人みんなに自慢してはりきってた。

取材の日、私は、赤いバラを何本か買って持って行った。少しでもいい店に見えるといいなと思って。ヘルはいつもよりいい着物を着て、店を片付けてた。バラを見るとすごく喜んで、

「綺麗だね。高かったでしょ。」って何度も言ってた。

取材に来たのは、秋川っていう三十代のフリーライター。日焼けした身体は逞しかったけど、笑うと子どもみたいで、人なつっこい男だった。ヘルは秋川のとなりに座って、お酌をしながら取材に応えてた。

ヘルになる。

名前はヘルです。そのまま書いて頂いて構いませんよ。もう長いこと使ってるから、本名で呼ばれてもピンと来なくて。パラオにいたとき海軍大尉がつけてくれました。ええ、海軍です。意味ですか？　北欧の方の神話に出てくる「死の女神」なんですって。そうよ、怖いんだから。（笑って）嘘、嘘。海軍さんが使う隠語なんです。「スケベ」って意味。あら、スケベっていうのは褒め言葉だったのよ。男の人にとっては命の源だもの。秋川さんだってお好きでしょう。……ええ、パラオにいたときが一番幸せでした。おかげさまで借金も返せましたし、海軍さんには本当に感謝してるんです。大切にしてもらいましたから。蔑まれることはなかったですね。そりゃ、海軍さんと言ったって、いろんな人がおりますけど、お国のために働く同志ですもの。家族みたいなもんでね。弱りきった兵隊さんが元気になるのが喜びでした。いえ、特別なことはしてません。あたしとしてはその時その時の相手を、本当に好きになって抱かれていただけなんです。本当に。それは置屋にいたときから変わりませんねえ。え、水揚げですか。……ええ、覚えてますよ。神楽坂の置屋でね。十四歳でした。いいえ、それくらい普通でしたよ。月のものさえあれば、もう大人ですもの……。バナナの輸入で儲けた会社の社長さんでした。私を水揚げしてくれた人です。よく台湾と日本を行き来してて「中国の攻撃を避けてジグザグに帰ってきたら、バナナが全部腐っちまった」なんてしょっちゅう言ってましたよ。きれいな庭のある待合でね、苔むした石灯籠に薄い紫色のあじさい。よく覚えてますよ。はじめは置屋のお母さんと、姐さんたちも一緒に宴会してましたけど、ほどよくお酒が入ったところであたし一人残されてね。……どうって。親切でしたよ。男の人ははじめての女にはみんな親切なんじゃないですか。……名前はちょっと。いまも経済界で大きな仕事をされてる方ですから。（厨房に）晋さん、お造りまだかしら。急いで。お願いしますよ。（秋川にお酌しながら）空けちゃってくださいな。もう一本つけますから。あ、空豆もいかが。いいのが入ってて。（厨房に）晋さん、空豆もひとつ。

私になる。

それからヘルはパラオで食べたごちそうの話をし始めた。だんだん辛かったことや苦しかったことも話すんだろう、そう思いながら、晋さんにだけ挨拶をして店を出た。

ヘルの記事が週刊誌に載ったのは、それから二週間後。
私はお昼休みに本屋に行って、週刊誌を買い、記事を読んだ。記事の中のヘルは、戦争に翻弄されながらも、死んでいった男たちに愛された、聖母みたいな女性として、美しく描かれてた。玉砕した兵士たちがヘルの名前を呼んで死んでいったと、確かめようのないことまで書かれてた。バラを喜んでくれたヘルの姿を思い出す。この記事を見たらヘルも怒ると思った。見なかったことにしよう、私はそう決めて、雑誌を捨てた。ところが、その日、仕事帰りに「はる屋」に寄ると、ヘルはお客さんたちと週刊誌を覗き込んでるところだった。客のひとりが記事を読み上げる。「死の女神と呼ばれて〜ある従軍慰安婦の生涯〜」ヘルはそれを聞いて、満足そうに頷いてた。
「ヘル、ほんとにこんなこと話したの？」
私が聞くと、ヘルは笑って、
「まさか。秋川さんが大げさに書いたんだよ。」
「いいの、それで。」
「まあ、いいじゃないか。素敵に書いてくれたんだから。」
ヘルはまんざらでもない様子で、記事を切り抜いて、壁に貼り始めた。
そして、記事を貼り終えると言った。
「あたし、秋川さんと結婚する。」
「嘘でしょ。」
「嘘じゃないさ、だってもう一緒に暮らす部屋も借りたもの。あの人ね、あたしをほっとけないって言うんだよ。」
お客さんたちが「よかったじゃねえか。」「幸せになれよ。」と口々に言う。一升瓶を開けて乾杯した後、ヘルがパラオで教わった南洋踊りを踊り始めたら、みんな面白がっちゃって、近所から苦情が来るほどの大騒ぎになった。（南洋踊りが流れる。）……私、おめでとうって言えなかった。どうしても祝福する気持ちになれなくて。だってこんな記事しか書けない人が、ヘルのこと理解できると思えなかった。客が帰ったあともヘルはずっとはしゃいでた。皿を片付けながら、南洋踊りの歌を口ずさんで。
私、ヘルに言った。……がまんできなかった。

ねえ、その記事、いつまで貼ってるつもり？

ヘルが歌うのをやめた。

こういう風に見られたいんだね、ヘルは。
本当に好きになって抱かれてたんだと思われて嬉しいの？

ヘルがラジオをつけた。

ラジオをつける。音楽が流れる。

……ほんとは戸田さんだけに抱かれてたかったんじゃないの。……いいんだよ、嫌だったって言ったって。いまでもうなされるって言ってたじゃない。昔のこと夢に見るって。なんでそのこと言わないの。……私知ってるよ。ハマさんて人でしょ。ヘルを水揚げした人。はる子姐さんから聞いたことある。置屋時代のお客さんで、バナナの輸入で一儲けした人がいたって。六十超えてるのに、ひどい遊び人で、芸者に病気うつすもんだから困ったって。……たった十四の子が、どうしてそんな人に身体売らないといけなかったの。ヘル、言ってたでしょ。戦争が終わったあとも、身体売るしかなかったんだって。それはなんでなの。そういうこと話さなくちゃ、ほんとのことが伝わらないじゃない。

ヘルになる。

つまらないこと言うんじゃないよ。あんたにはわからないんだ。

ヘルがラジオのボリュームをあげる。
私になる。
ラジオを消す。
グラスに水を注ぎ、飲む。
長い沈黙。

その夏、ヘルは秋川と暮らし始めた。とても嬉しそうだった。
でも、結婚することはなかった。
たった三ヶ月で、秋川と暮らしてたアパートを飛び出して、はる子姐さんの家に転がり込んだ。
なにがあったかは、はる子姐さんにも言おうとはしなかった。

……私は、頼まれて、ヘルの新しいアパートを探した。
契約のとき、はじめてヘルの本当の名前を知った。
鈴木カズ。それがヘルの本名。
引っ越しの日、私は白い紙に「鈴木カズ」と書いて、ヘルの部屋の郵便受けに貼った。

秋川と別れてから、ヘルは「はる屋」を無断で休むようになった。

ヘルの新しいアパートは、「はる屋」から歩いて二十分のところにあった。壁に這わせたツタと、木でできた大きな玄関が特徴の、古いアパート。部屋の西側には表通りに面した大きな窓があって、夕方には子どもたちが帰っていくのがよく見える。その日もヘルは西日を浴びながら子どもたちを見てた。

窓の外から子ども達の声。

（窓辺に座るヘルに）ヘル。なにしてるの。寒いのに、開けっ放しで。

「あの人、養子でも取ろうかって言ったんだよ。……夢見てるものが全然違った。」

「……パラオに帰りたい。」

なに言ってんの。パラオ、パラオって、これからのこと、もうちょっとちゃんと考えなよ。いつかね。宝くじでも当たったら連れてってあげる。だから店行こう。ねえ、ヘル。

ヘルは動かない。

……じゃあ、先に行ってるから、ちゃんと来なさいよ。はる子姐さんも待ってるから。

私は部屋を出て、「はる屋」に戻った。その日、ヘルは店には来なかった。

4

ひと月後の二月なかば。

夜の八時半過ぎ。雨上がりで、道が濡れてる。

寒かった。

ヘルの家に向かってた。「はる屋」に来てなかったから。……製本所の主任になったからお祝いしてって頼んでた。そう言ったら出て来るかなと思って。だけど、やっぱりヘルは来なくて。八時まで待って。……晋さんは放っておけって言った。でも、私は、ヘルの家に向かった。

通りからヘルの部屋が見える。灯りは消えてる。

建物に入って、二階に上がると、音楽が聞こえてきた。

音楽が聞こえる。

ラジオだった。ヘルの部屋から聞こえてる。

扉を叩く。ラジオの音が消える。

ヘル。いるの。

返事はない。鍵がかかってなかったから、扉を開けた。

「入らないで。」とヘルの声がした。

……でも、私は部屋に入った。

暗い部屋に廊下の明かりが差し込んでる。ヘルは窓辺に座ってた。

布団を頭からかぶって。

電気スタンドをつけて、扉を閉める。布団がかすかに動く。

ヘル。大丈夫、風邪でもひいた？

布団をはいだ。……ヘルと目が合う。目の周りには大きな青あざ。ほっぺたがゆがんで、笑ってるみたいに見える。ブラウスが血だらけだった。

なに、これ。……どうしたの、その顔。大丈夫？　痛い？　どうしよう。病院行く？　……え、たばこ。わかった、あとで買って来る。わかってる、ホープでしょ。ねえ、それよりなにがあったの。ケンカ？　誰にやられたの。ねえ、ヘル。……え、知らない人ってどういうこと？……もしかして男の人？　……身体売ったの、ここで。……どうして？　（長い間）……お金は。取られたの。……やっぱり警察呼んでくる。……しょうがないじゃない、犯罪なんだから。警察に任せるしかないでしょ。大丈夫だよ、こっちが完全に被害者なんだから、堂々としてれば。……もう、じゃあどうすんのよ。このまま泣き寝入りするつもり。身体なんか売って。いつまでもヘルなんて名乗ってるから、こんな目に遭うんだよ。

ヘルが私を見上げた。

なに。その顔。ねえお願い、もっとちゃんと生きようよ。

……警察呼んでくる。大丈夫だよね、一人で。

部屋を出る。

私は部屋を飛び出し、階段をかけ降りて、玄関脇の共同電話から百十番通報をした。

（電話で）もしもし。はい。女性が部屋で暴行されて。お金も。そう、強盗です。名前は、……鈴木カズ。鈴木、カズです。四十代後半。はい、怪我もしてます。意識はあるけど、殴られて動けません。私ですか？　私は……娘です。住所は北区田端五の十……。

ヘルの部屋の郵便受けが目に入った。

上の段の一番右側。

郵便受けの名前は塗りつぶされて、「ヘル」って書き直されてた。

やってきた若い警察官は、正義感にあふれて、親切だった。一緒に二階にあがると、布団にくるまったままのヘルの前にしゃがみ込んで、大きな声でゆっくりと話しかけた。

「大丈夫ですか。ご自分の名前言えますか。」

ヘル。

「ヘル？」

そう。

「なにがあったか話せますか。」

……。

「ヘルさん。」

……この人がやったんです。

え。

この人がやったんです。

ヘルが私を指さしてる。何を言ってるのか、わからなかった。

こんな人知りません。この人がやったんです。

ちょっとなに言ってんの。

早く逮捕してください。この人がやったんです。

違う！　私じゃない。

この人知り合いの娘だって近づいてきて、あたしを騙してお金を取ろうとしたんです。

はあ？　なに言ってんのよ。

抵抗したら、顔や頭、何度もなぐって、お腹蹴って。

嘘だ。そんなことやってない。

早く捕まえてください。何度も殴られました。これまでも何度も。この人がやったんです。

なんでそんなデタラメ言うの。

この人がやったんです。この人がやったんです。この人がやったんです。

うるさい。黙って。（警官に）え、なんですか。なんにもしてないでしょ。うるさいって言っただけじゃない。私はなにもやってません。なんで警察行かないといけないんですか。痛い。ちょっと放してよ。放しなさいよ。放してってば。

抵抗すればするほど悪者みたいになって、最後には手錠までかけられて、パトカーに押し込ま

れた。野次馬が何人も集まってた。パトカーの扉が閉められたとき、アパートの方に振り返ったら、わきを支えられたヘルが救急車に乗り込むところだった。白っぽい街灯に照らされて、ヘルは晴れやかに笑ってた。

長い間。

それ以来私は「はる屋」に行くのをやめた。

その二年後、私は、製本所の同僚と結婚。子どもにも恵まれた。女の子。娘の手が離れると大手の印刷会社でパートをしながら、時々新聞に投稿をするようになった。ほとんどが娘のこと。……ヘルのことも忘れたわけじゃない。家事をしてるときや、夫婦で夜更かししたときに、ラジオをつけると、ヘルのことを思い出した。

あんたにはわからない。そう、ヘルは言った。

……私はヘルになにをしたんだろう。

長い沈黙。

ヘルに会わなくなってから十二年後。一九八六年の一月。製本所の所長が亡くなったと連絡をもらって、お葬式のために、久しぶりに駒込にいった。その帰り、家族と別れて、一人で線路沿いのあの細い坂道を下ってみた。道沿いに並ぶ店をひとつひとつ確認しながら、坂を下った。でも、「はる屋」はもうなくなっていた。「はる屋」があった場所には、大きなマンションが建ってた。ここにあんな店があったことも、はる子姐さんや晋さんやヘルがいたことも、全てがなかったことみたい。

フェンス越しに線路を見下ろしながら、ヘルとあった日のことを思いだした。

いなかったことにはしたくないと思った。

ヘルのことを書き残しておきたいと思ったのは、この時です。

水を飲む。

その三ヶ月後。ある建設会社にパンフレットの色校を届けに行ったとき、会議室の隣のテーブルで、若い男が上司に愚痴っていた。

ばあさんが立ち退かないんすよ。言ったじゃないすか。取り壊し予定のアパート。そう駒込の。他の住人はみんな出たんですけどね。ばあさん一人で頑張っちゃって。大家の代わりにアパート掃除したりして、ただで住んでたらしいすよ。説得しましたよ。新しい地下鉄が通るんだから、綺麗な街にしないとって。いや、もう全然駄目っすよ。強制執行の予定日伝えたら、パラオだの海軍だのって、わけわかんないこと言って立て籠もっちゃって。えーちょっと勘弁してくださいよ。無理っすよ。

ヘルはまだあそこにいる。私は、ヘルのアパートに向かった。

5

壁のツタと木の玄関はあの頃のままだった。でも、入り口には立ち入り禁止のテープ。アパートの前にはパトカーと二トントラックが止めてあった。執行官と数人の警官、引っ越し業者、建設会社の人、大家さん、そして野次馬。

ヘルの部屋の窓が開いている。さっきまでヘルがなにか叫んでたと、建設会社の人が教えてくれた。私はヘルの好きなたばこを買い、ヘルの説得をさせてほしいと頼みこんで、三十分だけという約束でアパートに入った。

テープをくぐって、軋む階段をのぼる。廊下には机やタンスで、バリケードが組まれていた。

ヘル。

ヘル。私。話がしたい。入ってもいい？

部屋の中からラジオが聞こえてきた。

私は慌てて机の下をくぐり、タンスの上を乗り越えて、部屋の扉をあけた。

ラジオニュースが流れている。

四月三〇日、お昼のニュースをお伝えします。ソ連閣僚会議は二八日夜、国営タス通信を通じ、ウクライナ共和国のチェルノブイリ原発で事故が発生、原子炉一基が破損、被災者がでたと発表しました。事故発生から三日後の二九日夜現在も同原発では炉心火災が続いている模様です。

ラジオのスイッチを切る。

薄暗い部屋に西日が射し込んでる。その窓辺にヘル。私は扉を閉めて、散乱したゴミをよけながら窓辺に近づき、ラジオがいくつも転がるなかに腰を下ろした。小さく膝をかかえて座っているヘルを前にしたら、頭が真っ白になった。言うべき言葉が見つからない。ただじっと座っているだけ。いつまでも、一言もしゃべらず。

口を開いたのはヘル。

「たばこ、持ってる？」

「うん。」

私、たばこを差し出す。

ヘルがたばこを一本取り出して、火をつける。久しぶりに見たヘルはすっかり老人の顔。頬はこけてたし、目は落ちくぼんで、細い手には血管が浮いてる。でも、弱々しい感じは全然しなかった。目に力があって、こっちをしっかりと見つめ返す。

ヘルは私の目を見つめて、ふーっと煙を吐き出した。

そこにいるのはヘル。

館山に行ってきたんだよ。千葉の館山。
はる子姐さんが施設にいてね、会いに来いっていうもんだから。
そこはね、コロニーっていうの。病気や障害抱えて、一人じゃ生活できない女たちが、集まって暮らしてる施設なんだ。
そこで女の人に会ったんだ。
その人、あたしと同じようにパラオにいたんだって。淋病うつされて、背骨折って車いすで生活してる。
その人、車いすなのに、施設の中を案内してくれた。あんな場所があったなんて、知らなかったよ。戦後にね、海軍の砲台があったところをもらい下げて作ったんだって。少しずつ山を切り開いてね。広い敷地に、女たちが暮らす寮があって、その周りには、やぎや豚のいる家畜小屋。小さい教会。納骨堂。山の上には広い畑もある。ちょうど蕪と青梗菜を収穫してた。
その畑のなかにね、小高い丘があって慰安婦の碑が立ってるんだよ。
その人、丘から見える海を眺めながら、言ってたよ。
「ばかやろうって言ってやりたいよ。」
それから、まぶしそうに目を細めて。
「ここからの景色はパラオに似てるだろ。」
ほんとにそっくりだった。山並みと海がね、そっくりなんだ。
あたし、どこにいるのかわからなくなった。
目の前にいるのが、その人なのか、あたしなのか、わからないんだよ。
いろいろなことを思い出した。そして、思ったんだ。
ああ、あたし、怒っていいんだって。

兵隊さんが入って来たんだ。窓から。日本刀持って。月がなくて真っ暗な夜だった。その部屋には八重ちゃんが寝てた。蚊帳ごと切りつけられたんだ。すごい悲鳴だった。人間の血ってあんなに飛び散るんだね。壁も天井も真っ赤だった。半分に裂けた蚊帳が血まみれになってぶら下がってた。兵隊さんはすぐに精神病院に入れられたけど、日本に送り返されるときに、海に飛び込んで死んじゃったんだ。そしたら、八重ちゃんが悪く言われるようになった。五十針も縫ったのに。純情な人をあんまりだますもんじゃないって。……あたしも言った。一緒になるなんて言ってだましたんだろうって。

でもやっぱりおかしいだろ。なんで八重ちゃんが悪いんだよ。
好きであんなところにいたわけじゃない。
お国のためっていうから行ったんだよ。
そりゃ借金も返したかった。だけど、その借金だって親のためだよ。
親だってお国のために我慢して、生きてけないから子ども売ったんじゃない。
なのに全部あたしたちのせいにされて、許せないと思った。

男はいいよ。戦地で辛い思いしたって言ったって、みんな軍人恩給もらってるじゃないか。帰って来りゃ、何事もなかったみたいに結婚して、子ども作って。グアムで兵隊さんが見つかったときのもてはやし方、覚えてる。厚生大臣が金一封贈ったり、洋服作ってやったりしてさ。なにが陛下のためだよ。あたしらだってそう言われて行ったのに、一銭だってもらえない。それどころか汚い、不潔って差別して。なにが女房に知れると困るよ。なにがもう来ないでくれよ。

サイレンが毎日鳴るんだ。毎日毎日。そのたんびに防空壕に逃げなくちゃいけないのに、ぎりぎりまで客取らされて、寝たあとの始末もできなかった。クレゾールもないんだから。消毒したって梅毒になる女はいたけどね。病気になったら死ぬしかないもの。そのうち、飛行機が来たんだ。三十機も、四十機も。たくさん飛んで来た。あっという間だった。波止場から軍隊のいるとこまでボンボンやられて。焼夷弾が旅館の屋根に刺さって、火噴いて。逃げる暇もなかった。たくさん女が死んだんだ。八重ちゃんも、品ちゃんも、花江も、京子も、若ちゃんも、みんな。八重ちゃんは防空壕まで行き着けなくて、逃げ込んだ下水ごと爆撃されて死んだ。京子と若ちゃんも一緒に埋まっちゃって。掘り起こそうとしたんだけど、そのまま埋めとけって。掘り起こしたって、犬に食われるだけだから。誰の子だかわからない赤ん坊を、殺して埋めた女もいたけど、みんな知らんぷりだった。気が狂った女もいたね。

ひどいじゃないか。

女郎だって人間なんだよ。

人間がなんのために生まれてきたと思ってるんだよ。

平気で足開いてるわけじゃないんだよ。

病気うつされて平気なわけない。

生まれたばっかりの自分の子ども殺して、平気なわけない。

あたしはヘルだよ。海軍大尉に名付けられた。なのになんでだれも助けてくれないの。あたしだって助けてほしいよ。どうにかしてよって言いたいよ。ジャングルで暮らすより、みじめな生活してる人間だっているんだよ。

毎晩夢に見るんだよ。火が燃えるなかを夢中で走ってるんだ。爆撃で地面が揺れる。人が焦げる臭い。バラバラになった肉のかけらがマングローブの幹にこびりついてる。暑い。ゲジ虫が這い上ってくる。ジャングルに捨てられた女たちの声が聞こえる。そこに転がってるのは誰？

もしかして、あたし？　ううん、違う、あれはあたしじゃない。いち子、そう、あれはいち子。やめて、逆恨みだよ。可愛がってやったじゃない。ほんとの妹みたいに、可愛がってやったのに。あ、違う。これはいち子じゃない。小鈴ちゃんだ。小鈴ちゃん。死なないで。小鈴ちゃん。違う。小鈴ちゃんだけじゃない。八重ちゃんや、品ちゃん、はる子姐さんもいる。ここはどこ。どこに連れて行くの。嫌だ。そっちは暗い。ゲジ虫がいる。行きたくない。やめて、死にたくない。殺さないで。あれは誰。あれは、あたし。違う違う。あたしじゃない。鈴木カズ。誰それ。そんな女は知らない。違う。あたしはヘル。ヘルだよ。海軍の将校たちに愛されたヘル。あの戦いになくてはならなかったヘル。違う、鈴木カズじゃない。違うってば。あたしはヘル。あたしはヘル。あたしはヘル。あたしはヘル。

ラジオから「兵につぐ」放送が流れる。
大本営発表や玉音放送も重なる。

「勅命が発せられたのである。」
「天皇陛下の御命令が発せられたのである。」
「お前達があくまでも抵抗したならば、逆賊とならなければならない。」
「速かに現在の位置を棄てて帰つて来い。」

動かないよ、あたしは。
もう人に言われて動くのはまっぴら。
あたしはここにいたいんだ。ここで暮らしたいんだよ。
好きにさせてくれたら、あたし許すよ。
国も、軍隊も、差別した世間のやつらもみんな許す。
あんたのことも、許してやるよ。
だから、お願い。

南洋踊りの音楽「夜明け前」が流れる。

夜明け前に　あなたの夢見て
起きると見たら　大変つかれた
もし出来るなら　ああ　小鳥になって
あなたの元へ　時々飛んでゆく
私の心は　あなたのために
大変やせた　死ぬかもしれません

外はすっかり夜になっている。表の街灯が点る。
窓から青白い光が射し込む。
ヘル、顔をあげ、光をあおぐ。

まぶしい。ここは太陽が近いねえ。

静かにたばこを置く。
私になる。
椅子に座って原稿の続きを読み始める。

それから、すぐだった。バリケードが壊されて、強制執行がはじまった。

長い沈黙。

私はその時、作業員の人とヘルが居なくなるのを、ただの風景のように見送った。当たり前のように、そこには誰も居なくなった。

私は何もしなかった。
何も出来なかった。

残ったのはヘルの言葉の記憶。

こんな風に書き残そうとする事を、ヘルが望んでいるかはわからない。

私、原稿に言葉を書き足し、読む。

でも、
あなたを居なかった存在にしてはいけない。
私に何が出来るかわからないけれど、
それだけは確信しています。

未来の為に。

ラジオをつける。音楽が流れる。
私、原稿に向かい続ける。

溶暗。

（第二十五稿　二〇一九年十月八日）

幕

参考文献

「マリアの賛歌」城田すず子著（かにた出版部）
「証言記録・従軍慰安婦・看護婦」広田和子著（新人物文庫）
「思川　山谷に生きる女たち」宮下忠子著（筑摩書房）
「〝声なき女〟八万人の告発　従軍慰安婦」千田夏光著（双葉社）
「鉄火娼婦・高梨タカ一代記　日の丸を腰に巻いて」玉井紀子著（徳間書店）
「従軍慰安婦」吉見義明著（岩波新書）
「「慰安婦」問題 すべての疑問に答えます。」アクティブミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」（wam）著
「性の歴史学」藤目ゆき著（不二出版）
「「慰安婦」問題の本質」藤目ゆき著（現代書館）
「秋葉原、内田ラジオでございます」内田久子著（廣済堂出版）
「ラジオの時代　ラジオは茶の間の主役だった」竹山昭子著（世界思想社）